うな者オ入れるなア、何も私が悪い故ぢやごぜわせんぞ。まア彼世へ行つたらみんなゆつくり出來ますべえよ」

彼は注意深い、疑り深い、あら〳〵しい眼付で、凡ての囚人を見比べた。が皆は一言も口を開かずに眞情の籠つたやうな眼つきで彼を見返した。と又彼は齒を出して笑ひながら、ウエルネルの膝を叩いて

「先生、まアかうでごわす。歌の文句にもあるぢやごわせんか。氣を付けて音を立てるな、樫の樹林つてねえ」

「君は何故僕を先生だなんて云ふんだい。僕等はみんな……」

「いかさまねえ」と滿足さうにチゲーンは答へて「お前樣だつてやつぱし私と並んでやつつけられる仲間だからにやア、何も先生と云ふ譯アごわせんてねえ。本物の先生あすこに御座るだ」

かう云つて彼は默つてヂッとして居る巡査を指さした。

「けんど其處に御座るお仲間ア何だかひどく面白うなさゝうぢやごわせんか」と云つて彼はワシリーの方を見ながら「ねえお前さま怖ねえだかね」

「なアに！」と動き澁る舌が答へた。

「なら、さう何も心配なさるにや及びましねえ。恥しいやうな事さちつともごわせんだ。絞められる時に尻尾オ振つて齒アむき出すな

あ犬だけでごわすぜ。お前様あ人間ぢやごわせんか。所であのデクノボウのやうな奴さん何者でごわすだ。よもやお前様のお仲間ぢやごわすめえね」

彼の眼は絶えず躍つた。絶え間なく、ちゆう〳〵と音をさせては澤山な甘味のありさうな唾を吐いた。ヤンソンは二つに折れ曲つて隅の方にぢつとして居た。はげた毛皮の帽子の縁が心持動いたが、別に何とも口をきくのではなかつた。ウエルネルは代つて答へた。

「あの男は主人を殺したと云ふんだ」

「おや、おや」と驚いてチゲーンは叫んで「いくら人を殺したとつて、こねえな鳥あ逃がしても好えだなア」

やゝ暫く彼は偸み口にムスヤを見て居たが、やがて急に向き直つて、まともに鋭く見つめた。

「お嬢さま。ねえ、そのお嬢さま。お前さまア又どうなされたゞね。頰つぺたア紅くして笑つてござるだ。あれ、あれ」かう云つて曲つた指の先でウエルネルの膝を攫んだ。

ぽつと紅くなつて、幾分どぎまぎして、ムスヤは自分を怪んで居る探るやうなあらあらしい眼の視線を眞面に受け返した。

小さな列車は狹い軌道の上を疾走した。機關手は人でも轢くのを怖れて居ると見えて、曲つたり、傾斜へ來たりする毎に汽笛を鳴らした。これ程の心づかひ、これ程の勞力、つまり人間のあらん限り

の働きが、絞殺される人を連れて行く爲めに費やされるのかと思ふと、何だか怖ろしくなるではないか。此世の中で一番狂氣じみた事も、至極簡單な左程むつかしくもない事のやうに運んで居る。車は走つた。人々はいつもと同じくまるで普通の旅行でもして居るやうに坐つて居た。やがてはいつもと同じやうに「五分間停車」と云ふ工合にして停車するに違ひない。

して其の次に來るものは死――永遠――偉大なる神祕。

到着

汽車は速に進んだ。

セルゲイ・ゴロープインは、何でも五六年前に矢張この線路に沿うた或る小さな田舍家で一夏を送つた事のあるのを思ひ出した。晝にも夜にも幾度か此の道を往來した事があるので、好く知つて居る。目を閉ぢて、彼は夜晩くまで友達の所に居て、最終列車で歸る有樣をも明らかに想像する事が出來た。

「もうぢき着くな」と思つて突立つた。眼には暗い格子窓が映つた。あたりのものは何一つびくりとも動かない。たゞチゲーンだけが唾を吐きつゞけて居る。そして戸口と兵士とをさがすやうに眼を箱の隅から隅へとくばつた。

「寒いなア」とワシリー・カシーリンが凍り付いたやうに見える薄い唇の間から云つた。

ターニャ・コワールチユクは相變らず母親らしい風に感動して、

「大層暖かい襟巻があるから、これでお巻きなさいよ……」

「頸をかい」とセルゲイは問ひ返して、自分ながらその問ひにおびえた。

「何でせうねえ。いゝからお取りよ」

「巻いたら好いぢやないか。暖くなるよ」とウルネルも口を添へた。

彼はヤンソンの方へ向いて、やさしく訊ねた。

「だが君も寒かアないのかね」

「ウエルネルさん、その人は多分煙草が吸ひたいんでせうよ。ねえ、お前煙草がのみたいんでせう。」とムスヤは訊ねて「煙草ならばいくらかあるわ」

「へえ、煙草が飲みてえだ」

「巻煙草をおやりよ、セルゲイ」とウエルネルが云つた。

セルゲイは最う云はれぬ先から巻煙草入を出しかけて居た。

皆は巻煙草を取つてマッチを擦ると共に、ヤンソンの土くれ立つた指と、その口から出る青い煙の輪とを、やさしい眼つきで見出した。

「ありがたう」とヤンソンは云つて「好え煙草だねえ」

「妙だなア」とセルゲイが云つた。
「何が妙だい」とウエルネルは問ひ返した。
「卷煙草がさ」とセルゲイは云ひかけて思つた事を皆云ふまいとした。
ヤンソンは血の氣のない、それでもまだ生きて居る指の中に卷煙草を挾んで、不思議さうにそれを眺めて居る。皆の視線はその小さな紙片と鼠色の灰の中から立ち上る小さい煙の輪とに集つた。
卷煙草は燃え盡した。
「もうおしまひ」とターニャが云つた。
「さうよ、おしまひだわ」

「しやうが無いなア」とウエルネルは云つて、氣づかはしさうにヤンソンを見た。ヤンソンは卷煙草を持つたまゝ死んだやうに手をだらりと下げて居る。と突然チゲーンが向き直つて、顏をウエルネルの顏に押しつけるやうにし、此方の眼を覗き込みながら囁いた。
「どうでごわす、先生、皆で護送の兵士をやつゝけるとしたら。どないなもんでごわせう?」
「よさうよ」とウエルネルは答へた。
「はあてね? 喧嘩アして死んだ方が好えぢやごわせんか。私が奴をぶんなぐる、奴が私をぶんなぐる、さうなりや同じ死ぬにも自分にやそれが分りましねえだ」

「なアに、そんな事するにや及ばんよ」とウエネルは云つて、ヤンソンの方へ向き直り

「何故君は煙草を吸はないんだい」

ヤンソンの萎びた顔はみじめにも皺だらけになつて居る。まるで顔の褶を動かす絲を誰かに引張られでもしたやうだ。眠て居てうなされた時のやうに、生氣のない聲でヤンソンは涙も出さずにしく〳〵泣いた。

「煙草オのめねえ。あゝ、あゝ、あゝ俺ァ絞め殺されるだ。あゝあゝあゝ。」

皆その方へ向いた。ターニャはひどく泣きながら、その腕をなで

ゝやり、帽子を直してやつた。

「さア、さア、泣くんぢやありませんよ。」

突然列車ががたゞ〳〵ぶつかるやうな音をして、傾斜を上りかけた。四人等は一寸起ち上つた。

「とう〳〵來た」とセルゲイは云つた。

まるで箱の中の空氣が一時に煽り出されるやうな氣がした。息をするのが苦しくなつた。心臓に血が込み上げて、胸が苦しくなり、喉がつまり、動悸が物狂はしくなり、血がおびえて逆戻する樣な氣がした。彼等の眼は震へる板の間を見つめ、彼等の耳はゆるくなつた車の音を聞いた。車の回轉はだん〳〵とゆるくなり、やがて靜か

に止つた。

汽車が停つたのだ。

囚人等は一種云ふに云はれぬ痲痺狀態に陷つた。少しも苦しくはないが、何だか一種無智覺の狀態にあつて生をつゞけて居るやうな氣がした。活きた體がなくなつてたゞ幽靈のやうなものが動き廻り聲なく話し、音なく歩いて居る。彼等は客車を出た。森の新鮮な空氣を吸ひながら彼等は二人づゝ組をなした。夢を見て居るやうな恰好で、ヤンソンは無遠慮に身悶えした。皆は客車の中から彼を引き出した。

「歩いて行くのかなア」と陽氣さうに誰かゞ云つた。

「遠くはないよ」と無頓着な聲が答へた。

一言も口を利かずに彼等はじめ〳〵した泥路を辿つて森の中へ進み入つた。足は辷つて雪の中へ埋つた。彼は時々無意識に仲間の手にからみついた。苦しい息づかひをしながら、一列の兵隊が囚人等の兩側に歩いた。いら〳〵した聲がつぶやく。

「道を綺麗にする事が出來んのかなア。歩き惡くて仕樣がない」

恐れ入つたやうな聲が應ずる。

「掃除はしたのですが、閣下何分にも雪解がするもんですから、して見やうがないのです」

囚人等はだん〳〵と我に返つた。「まつたくだ、此の路を綺麗にす

るなんて出來ない事だらう」と云ふやうな考がふと浮んだ。と又何だか分らなくなつてたゞ僅に嗅覺だけが殘る。强烈な氣持の好い森の香が鋭く感じられる。すると又凡てがはつきりと考へられるやうになる。森　夜　路……すぐ目の前にどうしても逃る事の出來ぬ死が迫つて居ると云ふ事實。とちよい〳〵こそ〳〵話が初まる。

「もう大概四時だらう」

「だからさう云つたんだ。出かけが早すぎたよ」

「日の出は五時だよ」

「さうだ、五時だ。待つて居ると好かつたなア」

一行はしのゝめのほの暗い中に止つた。すぐ近くに、森の影が地

に映つてゆれて居る。その森の後にカンテラが二つ苦もなくゆれて居る。そこに絞首臺が立てゝあるのだ。

「上靴を片方なくしちやつた」とセルゲイが云つた。

「なに？」と何の事だか分らずにウエルネルが問ひ返した。

「なくしちやつたんだ。冷たくて仕樣がない」

「ワシリーは何處に居る」

「知らない。あそこに居た」

ワシリーはすぐ皆の傍に沈み込んで身動もせずに立つて居た。

「ムスヤはどこに居る」

「此處に居てよ。貴方は誰？　ウエルネルさん？」

カンテラの音もなく、而も恐ろしい意味を藏して居るやうな動搖から眼を避けて彼等は互に顏を見合つた。左の方の森の淺いあたりがだん〳〵明るくなつたやうだ。そしてそれを透して何かは知ら廣漠とした、灰色の、平らなものが見えた。濕つたしッとりした微風がそこから吹いて來る。

「海だ！」とセルゲイは叫んで、濕つた空氣を啜るやうに吸ひながら「海だ！」と再び叫んだ。

ムスヤは歌の一節でそれに應じた。

「わが愛は廣き海原」

「何だつて、ムスヤ？」

「此の世の岸の得やは容るべき、
わが愛は廣き海原」

「わが愛は廣き海原」と悲しげにセルゲイも同じ事を云つた。

「わが愛は廣き海原」とウエルネルも應じた。と突然驚いやうに彼は叫んだ。

「ムスヤ、えゝムスヤ、貴女はまだ眞實に若いんだねえ」

折も折、ウエルネルの耳元で、チゲーンの息づまつた狂氣じみた聲が響いた。

「先生、先生、森を御覽なせえ。あゝ、あゝ。何ちう事た！　ホラそこだ！　カンテラ！　あゝあゝ。あれが死刑臺か」

ウエルネルは彼を見た。ぶる〳〵震へたその様子は見るも怖ろしい程であつた。

「お別れをしませうか」とターニャが云つた。

「まだ好いさ。これからまだ宣告を讀みあげるんだから。それはさうとヤンソンは何處に居るんだね」

ヤンソンは人々に圍まれて、雪の上に打つ倒れて居る。アンモニヤの強烈な臭があたりに漂うて居た。

「ドクトル、もうぢきよろしいですか」と誰かゞやきもきして云つた。

「何でもない。ほんの一寸した發作ですよ。雪で耳を拭いてやつて

ください。もう大分よくなつた。どうぞお讀みください」

暗いカンテラの明りが、紙の上に落ち、手袋を取つた白い手の上に落ちた。紙も手も震へて居る。聲も震へた。

「皆さん、或は讀まない方が却て好いかも知れん。皆御存じでせう」

「讀まない方がよろしい」と一同に代つてウエルネルが云つた。と見る間に燈火が消えた。

罪人等は坊さんの勤經をも拒んだ。チゲーンが云ふには

「つまらんこつちやごわしねえか。お坊様ァゆるしておくんなさる。片一方ぢや絞め殺してくんなさる」

坊さんの廣い黑いシルウエットが二三歩後退りをして見えなくなつた。夜が明け初めた。雪はだん〳〵と白く、罪人等の顏はだん々々と黑く、森はだん〳〵と判明となり痛ましげに見えた。

「皆さん、隨意に相手を選んで、二人づゝで行つてください。それにしても餘りせかぬやうにしていたゞきたい」

ウエルネルはやつと立ち上つて、二人の兵士に支へて貰つて居るヤンソンを指さした。

「僕はあの男と行かう。君、セルゲーはワシリーと行きたまへ。眞先に行くが好いよ」

「好いとも」

「妾、貴女と行きませうね。ムスヤ！」とターニヤが云つて「さア、皆で接吻しませうよ」

あわたゞしく彼等は接吻を取り交した。チゲーンは力强くやつたので、皆は齒のあたるのを覺えた。ヤンソンはおとなしく口を半ば開いてやつたが、自分では何をして居るのだか分らなさうであつた。セルゲイとカシーリンとが二歩三歩歩き出すと急にカシーリンが立ち止つて、何だか妙な聞いた事もないやうな大きな聲を出して叫んだ。

「諸君、さよなら」

「さよなら」と一同は應じた。

二人は又歩き出した。しいんとなつた。森影のカンテラもぢつと動かないで居る。一同は叫ぶ聲か物云ふ聲か、それとも何か知ら音でもするかと待つて居たが此方と同じく彼方も靜まり返つて居た。

「あゝ、神樣！」と嗄れた聲で誰かゞ叫んだ。

皆は振り向いた。それはチゲーンであつた。彼はなほ狂氣のやうに叫ぶ。

「俺等ア殺されるだ」

彼は兩手で虛空を攫みながら身を悶えた。そして又しても叫ぶ。

「あゝ！　俺ア一人で殺されるだか。あゝ、あゝ！」

彼のひき釣つたやうな手がウエルネルの手を攫んだ。そしてなほ

言葉をつゞけた。

「先生、ねえ、先生。俺と一緒に行つておくんなせえ。だめかね」

ウエルネルは顏を曇らせて答へた。

「だめだ。僕はヤンソンと行く事になつて居るんだから」

「あゝ、あゝ。ぢや俺一人で。何ちうこつた。何ちうこつた」

ムスヤは一歩その方へ進み出で、やさしく云つた。

「妾一緒に行きませうね」

チゲーンは後退りして、大きなむき出た眼をぢつと見据ゑた。

「お前さまが？」

「えゝ」

「だけれどお前さま餘り小ちえだもんねえ、私が怖くねえかね。いや、面白うねえ。俺ア一人で行くだ」

「でも妾怖くはないのよ」

チゲーンはニヤリと笑つた。

「お前さま知んなさるめえが、私は强盗でごわすぜ。それでも行つておくんなさる氣かね。まア考えて見ておくんなせえ。お前さまが厭だと云はしたつて、私ちつとも腹ア立てましねえだよ」

ムスヤは口を噤んだ。日の出の微かな光の裡に彼女の顏は輝やかしく、神祕な色を帶びたやうに見えた。といきなりチゲーンの方へ足早に進み寄つて、手を取るや否や力强く接吻した。チゲーンはそ

の肩に手をかけ、心持それを押しのけるやうにして、頰にも眼にも音高く接吻した。

つひ近くに居た兵士は立ち止つて、手を擴げた拍子に銃を落した。だが屈んでそれを拾はうともしないで、やゝ暫く突立つて居た。やがて大急ぎで向き直つて、森の中へ歩を運んだ。

「何處へ行くんだ」とその仲間がびつくりしたやうな聲で呼んだ。

「とまれ！」

それにも拘らず一人は苦しさうにして進みつゞけた。と思ふときなり空を攫んで俯伏に倒れた。

「馬鹿野郎、鐵砲拾はんか。ぐづ〳〵しとると俺が拾ふだぞ」とチ

ゲーンは斷乎たる態度で叫んだ。「手前は手前の役目を知んねえだな。まだ死んだ人間を見た事ねえだな。」

再びカンテラがゆれた。ウエルネルとヤンソンの番が來たのだ。

「さいなら、先生」とチゲーンは大きな聲で云つて「あの世で又御目にかゝりますべえよ。あの世で遇つても、知らねえ振なせえますなよ」

「さよなら！」

「俺ア殺されるだかなア」と微かな聲でヤンソンが又しても云つた。

それをも構はずウエルネルはその手を攫んで、二三歩ヤンソンを引き出した。やがて彼は雪の中へ埋つたらしい。人々はその上に屈

んで引き起して連れて行つた。彼は兵士の腕に抱へられながら力無く悶いた。

と又しても黄色いカンテラが動かなくなつた。

「では妾は？　ムスヤ！　妾は一人で行かなければならないんでせうか。」とターニャは悲しげに云つた。「妾達は今迄一緒に暮して居たのに今になつて……」

「ターニャさん。あらターニャさん！」

ムスヤが斯う云ふのをチゲーンは眞赤になつて遮つて自分からもぎとられるのが怖いやうにしつかりとムスヤを捕まへた。

「お嬢様！」と彼は叫んで「お前様ア獨で行けますだ。お前様ア靈

が綺麗だで、何處えでも好きな所へ獨で行けるだ。だけんど俺アそれが出來ねえ。俺ア盗賊だもんなア。俺ア獨ぢや行けねえ。「きさまは何處え行くか。人を殺した分際で盗みをした分際で」かう云はれますだ。私馬を盗んだ事もごわすだ。そんだもんで私この御方と一緒に、まるで罪のない赤兒と一緒のやうにして行きますだ。合點がめえりましたかね」

「えゝ、分つてよ。それなら行らつしやい。ムスヤさん今一度接吻させて頂戴な」

「さアなせえ、さアなせえ」とチゲーンは云つた。「お前樣方ア女子だでねえ。お互に別れをなせえませ」

とやがてムスヤとチゲーンの番が來た。ムスヤはつゝましやかに歩いた。足を辷らせ、習慣の力からそれとはなく裾を取つて歩いた。力の強い手で女の手を取りながら足で地面を探り〳〵男は女を死の際へと連れた。燈火は動かなくなつた。ターニャの周圍は又しても しいんと靜まり返つて、寂しくなつた。曉のほの白い光の中に、灰色の兵士が無言のまゝ立つて居た。

「妾獨ぼつちになつてしまつた」とターニャは云つた。そして太息を洩らした。「セルゲーも死ぬウエルネルとワシリーも死ぬ。それからムスヤも死にかゝつてゐる。もう妾獨だわ。兵隊さん、ねえ、この通り妾は獨ぼつちなの。獨ぼつちなのよ……」

太陽は海の上に現れた。

人々は死骸を箱詰にして、運び去つた。引き伸びた頸、腫れ上つた眼、口からはみ出して綠色になつた舌、さう云ふ形相をした死人の一團は、生前に來たと同じ道を戻つて行く。

かくて雪は依然として軟らかく、森の空氣は依然として清く薫ばしく漂うた。

眞白の道には、セルゲイの落して行つた黑い上靴がそのまゝになつて居た……

かうして人々は昇る朝日を迎へた。

——をはり——

大正二年五月十四日印刷
大正二年五月十七日發行

（定價金四拾五錢）

譯者　相馬昌治

發行者　矢島一
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行兼印刷者　藤宮吉之助
東京市神田區南神保町十五番地

發行所　海外文藝社
東京市神田區南神保町
振替東京二四四四四番

發賣所　中興館書店
東京神田區錦町壹丁目
振替東京四一二三番

泰平館書店
東京市神田區南神保町
振替東京二四八五九番

不許複製

（日進印刷株式會社印刷）

海外文藝叢書

・新美本・定價每册金四拾五錢・郵税各金四錢・

第一篇　七死刑囚物語　アンドレーエフ作　相馬御風譯　新刊發賣
第二篇　心の扉　ザイツエフ作　昇曙夢譯　五月廿日發賣
第三篇　月光　モウパツサン作　中村星湖譯　六月發賣
第四篇　初戀　ツルゲネーフ作　吉江孤雁譯　續刊
第五篇　三つの死　トルストイ作　加能作次郎譯　續刊
第六篇　犧牲　ウエデキンド作　田中介二譯　續刊
第七篇　死の歌　ズーダーマン作　鈴木悅譯　續刊
第八篇　皇子と燕　オスカー、ワイルド作　木間久雄譯　續刊

〔東京南神保田町〕　海外文藝社　〔振替東京二四四四〕

近刊豫告

アラン・ポオ氏作
谷崎精二氏譯

赤き死の假面

……六月發賣……

四六版全一册
上製美裝本

本書は近代神秘主義、象徵主義の開祖たるエドガア・アラン・ポオの最も傑出したる短篇十餘種を萃めたるもの、全編悉く鋭敏なる官能と、異常なる神經と、幽玄なる幻像との所産なり。赤き死の假面を裝へる運命の象徵あり、永遠の生命と戀どの暗示あり、萬有の神秘に觸れて自己の生活の中核に徹せんと欲する者は本書を讀め。

〔東京南神保田町〕　泰平館書店　〔振替東京九五八二〕

近刊豫告

アンドレーエフ氏作
伊東六郎氏譯

アナテマ

新型美裝本
全一冊

アナテマはサタンなり、惡魔なり。原作のロシヤ文壇に現はるゝや、ロシヤ宗教界は爲めに一大驚愕を惹起し、政府は之に興行禁止を命じ、作者は宗教界破門の厄に遭ふ。果して基督は奇蹟を行へるか？　基督は復活せるか？　たゞ聖書にのみ依り基督を知る者は、サタン・アナテマが如何に基督を飜弄せしかを讀みて、初めて基督の眞相を解せん。

泰平館書店　〔東京南神田町　振替東京九五八四二〕

モーパッサン氏原著　吉江孤雁氏譯

水の上

近刊

上製美本全壹冊

既に其の譯の全部は終りを告げた。今は專ら銑練中である。『水の上』はモーパッサンの傑作である。が故に譯者は一層の注意を以て努力を盡して居る。從來に於ける孤雁氏の譯筆は既に定評のあるものであるが、本書出づるに及ばゞ更に其の精華を發揮するであらう。

吉江孤雁氏著　小杉未醒氏裝幀　〔三版發賣〕

旅より旅へ

定價金四十五錢
郵稅金四錢

その近作二十五篇を蒐む。清新なる筆致と、爽快なる自然の大景と、是れ著者獨特の境地、……酣なる春、綠の天地、爽涼の夏季或は肅條の秋、自然の新生命を味はんとする者に敢て一本を薦む。

中興館書店　〔東京神田錦町一丁目　振替東京二一四三番〕

ブランデス氏原著　中澤臨川氏譯　【三版發賣】

露西亞印象記

正價金八十五錢
郵稅金八錢

イブセンヤ、スチニアードミルに私淑せる猶太人ゲオル、ブランデスの著である。そうして其の傑作の一つである。島崎藤村氏は、曩に『文章世界』誌上で、本書に就いて委しい批評を試み、『苟も文學を愛好する者には、是非此の本を讀ませたい、臨川氏の譯筆は現時の文壇に眞に尊重すべきものである』と賞讃された。然りブランデスを研究することに於て臨川氏は當今第一の人で、而も其の筆致の洒脫なる、よく原文の俤を髣髴されて居るのである。

中興館書店
〔東京神田區錦町一丁目〕〔振替東京一二三四番〕

窪田通治氏著　橋口五葉氏裝幀　【再版發賣】

評釋　伊勢物語

定價金八十五錢
郵稅金八錢

極めて清新な、さうして艶麗な才筆を持つて批評を試み、且つ精細な註釋を加へたものである。而も其の文藝上の作品として觀たる『伊勢物語』は如何なる價値を有するか、本書を繙かん者恐くは其の興味の甚深なるに驚くであらう。

窪田通治氏著　平福百穗氏裝幀　【再版發賣】

空穗歌集

定價金八十五錢
郵稅金八錢

氏の短歌と長詩とを蒐めたものである、瀟洒な綺麗な本である。內容も裝釘も一種の異彩を放つて居る。與謝野寛氏は『空穗氏の詩は曙の靜けさがある、夕暮の寂しさがある、有明月の爽淨がある、夕時雨の凄意がある』と言はれた。

中興館書店
〔東京神田區錦町一丁目〕〔振替東京一二三四番〕

―堅實―快速―懇切―は―
―泰平館書店の生命なり―

出版部

時世の要求に從ひ、汎く新進諸名家に依囑し、文藝・理・化・英・數・其他學藝上師範となる良書を刊行し、讀書界に貢献する所あらんとす、乞ふ愛讀を給へ。

販賣部

弊館は各出版元との特約がある、故に各種の書籍を廉價に取次ことが出來る、なほ勉學諸君の利便を計り、絶版品、其他〔古き本〕を、供給する機關が備へてある、往復はがきで照會すれば直ちに御返事をする。

注文規定

㊀御注文は凡て前金の事 ㊁送金は振替貯金による事 ㊂照會は往復はがきを要する事 ㊃注文書には書名・著作者名・册數を明記する事。

〔東京府神田區淺町〕 **泰平館書店** 〔振替東京九五八四二〕

迅速、懇篤、誠實の三要素を具備せる
―中興館通信販賣部の活躍―

新本部

教科書・醫書・洋書・法律書の一部を除き一切の圖書を定價の一割引で賣る。如何に多數の注文でも直に發送し得る用意と機關とを備へて居る其の迅速は生命である懇篤誠實は特徴である特色である

古本部

あらゆる古本を取次販賣する。和書・漢書の百般の圖書で恐く古本でないものはない、往復葉書で照會すれば直に品の有無と實價とを御返事する、古本の通信販賣は蓋し古い物は、勿論現代の文藝・學術に關する

注文規定

弊館を以て嚆矢とする、これによつて、學校・圖書館及び讀者諸子に非常の便益を供して居る。

㊀御注文は前金にて、實價に郵税を添ふること。㊁送金は振替貯金によること。㊂照會は往復葉書によること。㊃注文書には新本又は、古本と明記すること。

〔東京市神田區淺町一丁目〕 **中興館書店** 〔振替東京三二一四〕

ト工34-27
194

海外文藝雜誌

盃聖

毎月一回一日發行　定價一部金廿五錢
郵税一部壹錢半年分税共一圓四十錢

◉外國文藝の研究といふことに全力を注いで献し、大に本邦の文壇のために努力し、貢献し研鑽し、覺醒し、自覺し、向上しようといふことを目的として、『聖盃』は新たに生れた。

◉新しい海外文藝に接しやうとする力ある人々はこの新しい意義ある目的を有する人々は、『聖盃』を必ず讀まねばならぬ。

◉吾が『聖盃』は苟も文學を愛好する人々に、海外文藝の新味を味はんとする者は、必ず讀んで貰はねばならぬ。

本誌に執筆する人々は、先進の諸大家と角逐する同人等と兎に角、現代眞面目に努力して居る同人等の文壇が飜譯物の黄金時代に入らんとつゝある極めて喜ぶべき新現象を呈し來た今に於て『聖盃』は少くも其の先鋒として大に活躍を期して居る。

東京神田區錦町一丁目　中興館書店　東京番町三二四

終